

〈新刊紹介〉

竹内はるか著『東西アクセント境界地帯方言の変化——三重県北中部——』

本書は、日本語アクセントに関する社会言語学的研究、比較方言学的研究、並びに、アクセント変化の一般化理論の構築への貢献を視野に、東西方言アクセントの境界地帯である三重県北中部のアクセント変化の実態と動態を明らかにすることを目的としている。

本書の構成は次のとおりである。「序章」に続き、「第1章 三重県鈴鹿市方言の特徴」「第2章 三重県鈴鹿市方言のアクセントの動態」「第3章 鈴鹿市方言の用言活用形のアクセント」「第4章 拍数ごとにみる鈴鹿市方言のアクセントの多様性」「第5章 三重県鈴鹿市方言のアクセントの共通語化」「第6章 三重県亀山市方言における高年層のアクセント」「第7章 三重県北中部における若年層アクセントの地域差」「第8章 三重県北中部方言のアクセントの意識」「終章 三重県北中部方言アクセントの特徴」。末尾に「話者一覧」「参考文献」を付す。なお、本書は國學院大學過程博士論文出版助成金の交付を受けた出版物である。(田中佑)

(2019年2月10日発行 おうふう刊 A5判横組み 256頁 11,000円+税 ISBN 978-4-273-03827-4)

庵功雄著『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』

本書は、日本語指示詞の文脈指示用法を記述的に研究し、それを素材に、個別言語としての日本語の研究から一般言語学への貢献という可能性を模索した著である。言語教育のための対照研究に耐えうよう、明確な記述装置の設定を通して、文脈指示表現の記述的・理論的考察がなされている。ひつじ研究叢書〈言語編〉の第157巻として刊行された。

「まえがき」に続く5部18章構成。「Ⅰ 本研究の理論的枠組み」は「第1章 序論」「第2章 機能主義と対照研究」。「Ⅱ 記述のための装置」は「第3章 名詞の定性と指示性」「第4章 分析のレベル」「第5章 文脈をめぐって」「第6章 テキストタイプをめぐって」「第7章 テキスト研究と文法研究」「第8章 指示詞(指示表現)の文脈指示用法」「第9章 結束装置とその関連概念」。「Ⅲ 日本語指示詞の文脈指示用法の記述」は「第10章 指定指示の記述」「第11章 代行指示の記述」「第12章 名詞の結束装置としての機能」。「Ⅳ 一般言語学との対話を目指して」は「第13章 定冠詞と文脈指示」「第14章 指示と代用」「第15章 Hallidayの機能主義と文脈指示」。「Ⅴ 本研究の貢献と今後の課題」は「第16章 文脈指示研究に対する本研究の貢献」「第17章 対照研究に対する本研究の貢献」「第18章 日本語教育に対する貢献」で構成される。末尾に「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 288頁 5,200円+税 ISBN 978-4-89476-957-1)

今村圭介・ダニエルロング著『パラオにおける日本語の諸相』

本書は、パラオに残る日本語を記述・分析・考察し、その諸相を明らかにした著である。日本統治の歴史と社会的・言語的影響の概説にはじまり、地名・人名の考察、老年層世代が習得した「残存日本語」、書き言葉、パラオの離島アンガウル島における日本語使用、パラオ語における日本語借用語の詳細などが論じられている。

全体で14章構成。「第1章 本書の目的と背景」「第2章 パラオにおける日本語使用の歴史的背景」「第3章 パラオにおける日本語起源の地名」「第4章 パラオ人に見られる日本の姓名」「第5章 青年層パラオ人の日本語の特徴」「第6章 戦前世代の残存日本語」「第7章 戦前世代によるパラオ語の片仮名表記」「第8章 アンガウル島における準ビジン日本語」「第9章 アンガウル州の公用語としての日本語」「第10章 パラオ語における日本語借用語の特徴」「第11章 日本語借用語の使用変化」「第12章 日本語借用語の音韻規則の変化」「第13章 旧南洋群島の諸語における日本語借用語との比較」「第14章 総論」。末尾に「参考文献」「付録 日本語借用語一覧」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 232頁 5,800円+税 ISBN 978-4-89476-953-3)

尾山慎著『二合仮名の研究』

本書は、万葉集を考察の中心に据え、子音韻尾字を由来とする「仮名」の検証を通して万葉集における歌表記の実相を精緻化し、「仮名」が歩んだ展相と次代への連続・不連続を捉えることを目的としている。

本書の構成は次のとおり。「まえがき」「用例の扱い」に続き「術語説明にかえて」に「第1節 書記(論)と表記(論)について」「第2節 歌表記における「表意(性)」と「表語(性)」」「第3節 訓字、訓仮名、音仮名と表意性」「第4節 本書のキーワードを巡って」、「序章 文字、表記、書記を巡る議論の中で」に「導言」「第1節 現代の日本語と文字」「第2節 古代日本語と文字、表記、書記」「まとめ」、「第1章 子音韻尾字由来の仮名とその実相」に「導言」「第1節 子音韻尾字と、仮名としての使用」「第2節 子音韻尾字の韻母と声母」「第3節 略音仮名の基本的検証——入声——」「第4節 略音仮名の基本的検証——撥音——」「第5節 二合仮名の基本的検証」「まとめ」、「第2章 略音仮名と二合仮名との関係」に「導言」「第1節 略音仮名と二合仮名の消長」「第2節 韻尾の別と二種の仮名の生成」「第3節 略音仮名と二合仮名の「両用」」、「第3章 二合仮名の機能を巡る分析」に「導言」「第1節 非固有名詞表記における二合仮名」「第2節 二合仮名と多音節訓仮名」「第3節 万葉集所載地名表記における二合仮名」「第4節 万葉集における地名表記と二合仮名」「まとめ」、「第4章 訓字主体表記と子

音韻尾字音仮名」に「導言」「第1節 訓字主体表記と略音仮名」「第2節 訓字(訓仮名)と二合仮名の「両用」,「補章 萬葉集以外の子音韻尾字音仮名をめぐる——付論:ある異同の一例から——」に「導言」「第1節 古事記における子音韻尾字音仮名について(歌謡以外の本文)」「第2節 古事記歌謡における子音韻尾字音仮名について」「第3節 古代一次資料と子音韻尾字音仮名」「附論:「千遍」考——ある二合仮名と訓字を巡る異同例——」,「終章 二合仮名の真相」に「導言」「第1節 歌表記と二合仮名, 略音仮名」「第2節 結論にかえて——二合仮名の定位と萬葉集歌表記——」を収め,最後に「本書の課題と展望」が述べられる。また,巻末には「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。

なお,本書は平成30年度日本学術振興会科学研究費助成事業(研究成果公開促進費)の交付を受けた出版物である。(田中佑)

(2019年2月20日発行 和泉書院刊 A5判横組み 500頁 13,000円+税 ISBN 978-4-7576-0900-6)

吉田永弘著『転換する日本語文法』

本書の目的は,主に中世に起きた文法変化に着目し,変化が起きた時期,過程およびその理由を明らかにすることにある。具体的には,同じ形態を保ったまま異なる意味を表すようになった条件表現,可能表現,尊敬表現,断定表現に関する問題を扱っている。

本書の構成は次のとおりである。「本書のはじめに」に続き,「Ⅰ 古代語文法の変容」に「第1章 転換期としての中世」,「Ⅱ 条件表現」に「第2章 「ほどに」小史——原因理由を表す用法の成立——」「第3章 「によって」の接続助詞化——因果性接続助詞の消長——」「第4章 「ために」構文の変遷——「む」の時代から無標の時代へ——」「第5章 「とも」から「ても」へ」「第6章 「たとひ」構文の変遷」,「Ⅲ 可能表現」に「第7章 「る・らる」における肯定可能の展開」「第8章 「る・らる」における否定可能の展開」,「Ⅳ 尊敬表現」に「第9章 「る・らる」における尊敬用法の分類」「第10章 いわゆる「一般尊敬」の拡張」「第11章 いわゆる「公尊敬」について」「第12章 尊敬用法の「る・らる」の位置づけ」「第13章 「主催」から「尊敬」へ——「仰せらる」と「くださる」——」,「Ⅴ 断定表現」に「第14章 断定表現「にてあり」の成立——前接名詞に注目して——」「第15章 体言承接の「たり」の位置づけ」「第16章 今昔物語集の「にてあり」と「たり」を収め,末尾に「使用テキスト」「参考文献」「本書のおわりに」「索引(人名・事項)」を付す。

なお,本書は平成30年度國學院大學出版助成(乙)の交付を受けた出版物である。(田中佑)

(2019年2月20日発行 和泉書院刊 A5判横組み 336頁 8,000円+税 ISBN 978-4-7576-0899-3)

田中草大著『平安時代における変体漢文の研究』

本書は,氏が2016年に東京大学に提出した博士論文『平安時代における変体漢文の

日本語学的研究』に修正・改訂を加えたもので、平安時代の変体漢文を主な対象に、記録・文書・典籍からの広い用例採集と同時代の和文語・漢文訓読語との対照を通して、平安時代の変体漢文の実態を明らかにするものである。

序論・結論と本論三部からなる。本論の「第一部 語彙より見たる変体漢文の性格（一）——文体間共通語への着目——」と「第二部 語彙より見たる変体漢文の性格（二）——漢文訓読語的部分への着目——」では、平安時代の変体漢文の言語的特徴に対する語彙の観点からの検討が、「第三部 表記より見たる変体漢文の性格」では、変体漢文の訓法、不読字、表記体の変換現象に対する表記の観点からの検討が行われている。末尾に「初出一覧」「鶴の鳴く夜は…（あとがきに代えて）」「索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019年2月20日発行 勉誠出版刊 A5判縦組み 378頁 8,000円＋税 ISBN 978-4-585-29172-5）

佐藤貴裕著『近世節用集史の研究』

本書は、近世節用集を取り上げその展開を描くことで、近世節用集の辞書史的意義を検討するものである。諸本の総体を捉える方法論にはじまり、史的展開の大筋の提示、史的流れの詳細への言及という順で、近世節用集史の展開を描いている。

「まえがき」に続く、「第一部 序論」「第二部 総論——近世節用集史概観——」「第三部 各論——展開の諸相と研究課題——」「第四部 展望——新たな課題へ——」の四部構成。第一部は、「第一章 視点・方法」「第二章 節用集史の記述のために」「第三章 書名要素「節用集・節用」の通史」で、第二部は、「第一章 典型形成期」「第二章 教養書化期」「第三章 検索法開発期」「第四章 二極化期——イロハ・意義検索節用集の大型化——」「第五章 二極化期——早引節用集の大型化——」で、第三部は、「第一章 易林本『節用集』の諸問題」「第二章 横本『二体節用集』の諸問題」「第三章 寿閑本『節用集』の意義」「第四章『節用集』寛永六年本類の系統」「第五章『真草二行節用集』の刊行状況」「第六章 近世前期節用集の検索補助法」「第七章 早引節用集の位置づけをめぐる諸問題」「第八章 検索法多様化の余燼」「第九章 イロハ二重検索節用集の受容」で、第四部は、「第一章 節用集の辞書史的研究の現況と課題」「第二章 古本節用集における対利用者意識」「第三章 付録研究への展望と限界」で構成される。末尾に「あとがき」「参考文献」「付録 近世節用集一覧」「要語索引」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019年2月25日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 440頁 12,000円＋税 ISBN 978-4-8386-0717-4）

窪菌晴夫・木部暢子・高木千恵編『鹿児島県甌島方言からみる文法の諸相』

本書は、甌島方言の文法体系と構造を、現地での方言調査をもとに、歴史言語学と対照方言学の視点を交えて考察した研究論文集である。人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」における共同研究プロジェクト「甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」の研究成果の一つである。

本書では甌島方言の文法体系がさまざまな観点から分析されており、消滅の危機に瀕した方言の初めての文法書としても位置づけられる。

本書は、「序」に続く以下の4セクション、11の論文で構成されている。「I. 甌島里方言の文法解説」には、「甌島里方言の文法概説（松丸真大）」が、「II. 甌島の中を比べる」には、「甌島方言の格について（坂井美日）」「甌島方言の素材待遇形式の運用とその地域差（酒井雅史）」「甌島方言からみる言語変化と伝統方言形式のゆくえ（平塚雄亮）」が、「III. 里方言を掘り下げる」には、「甌島里方言のモダリティ表現（白岩広行・門屋飛央・野間純平・松丸真大）」「甌島里方言の条件表現（有田節子・岩田美穂・江口正）」が「IV. 甌島の外に広げる」には、「授与動詞「くれる」と敬語体系——甌島・北薩方言における運用から——（森勇太）」「甌島方言における対称詞について（山本空）」「指示副詞の形式と意味——古典語・甌島方言を通して——（藤本真理子）」「甌島里方言のノダ相当形式にみられる音変化——他方言と対照して——（野間純平）」「動詞語幹交替より紐解く九州方言のラ行五段化（黒木邦彦）」が収録されている。末尾に「索引」「編者・執筆者一覧」を付す。（阿久澤弘陽）（2019年2月27日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 304頁 4,600円+税 ISBN 978-4-87424-786-0）

福島直恭著『訓読と漢語の歴史』

「漢文を訓読する」という行為の結果として日本語に生まれた「訓読文」は当時の日本語話者にとっても違和感を覚える日本語文であった。本書はこのような訓読文がどのような経緯で成立し、その後どのような変遷をたどったのか、そしてそれはなぜかを明らかにしようとするものである。加えて、訓読文の変遷に重要な役割を果たした漢語についても詳しい説明を行っている。

本書の構成は次のとおりである。「本書を読んでくださる方へ」に続き、「序章 本書の基本的立場」「第1章 訓読についての基本的説明」「第2章 他文化受容の一形態としての借用」「第3章 漢語の受容と日本語の変化」「第4章 訓読文体の確立と訓読文の表記の変遷」「第5章 訓読文の変遷と終焉」「第6章 漢語が仲立ちした書記言語の交替」「終章 まとめとひとつの問題提起」。末尾に「注」「参考文献」「索引」を付す。

なお、本書は2018年度学習院女子大学研究成果刊行助成の交付を受けた出版物である。（田中佑）

（2019年2月28日発行 花鳥社刊 四六判縦組み 284頁 2,400円+税 ISBN 978-4-909832-03-0）

湯浅彩央著『近代日本語の当為表現』

本書は、当為表現と否定助辞の条件表現、禁止表現との比較・対照を通し、当為表現を否定表現の一形式として扱ってきた先行研究では明らかにされてこなかった、当為表現の特質に迫ろうとするものである。

本書の構成は次のとおりである。「序章 研究の視点と方法」「第一章 江戸語におけ

る否定表現・当為表現のヌ系からナイ系の変遷について——話者と聞き手の社会的関係・親疎関係——」「第二章 関東地方における当為表現」「第三章 近世以降の東西方言における禁止表現の史的研究——当為表現との関わりから——」「第四章 近世期尾張地方における当為表現」「第五章 近世期尾張方言資料における当為表現・禁止表現」「第六章 国語教科書における当為表現の変化——明治から昭和二〇年代にかけて——」「第七章 当為表現の全国分布とその解釈」「終章 近代日本語研究における中央語と方言」「おわりに」。末尾に「参考文献」「索引」を付す。

なお、本書は著者が2008年3月に立命館大学大学院に提出した博士論文を下敷きとしたものである。(田中佑)

(2019年3月5日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 230頁 8,800円+税 ISBN 978-4-8386-0716-7)

近藤要司著『古代語の疑問表現と感動表現の研究』

本書は、古代語の助詞が疑問や感動のさまざまな表現類型の中でもつ役割を考察した著である。第一部「疑問係助詞とその表現」では、疑問係助詞カと疑問係助詞ヤを主な対象に、第二部「感動喚体句の諸相」においては、上代と中古の感動喚体句を対象に、調査考察が行われている。

「まえがき」に続く、「第一部 疑問係助詞とその表現」「第二部 感動喚体句の諸相」の二部構成。第一部は、「序章 疑問係助詞カと疑問係助詞ヤについて」「第一章 係助詞カとその表現」「第二章 係助詞ヤとその表現」、第二部は、「序章 古代語における感動喚体句の諸相について」「第一章 上代の感動喚体句について」「第二章 中古の感動喚体句について」。末尾に「初出文献一覧」「初出一覧」「あとがき」「事項索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年3月15日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 504頁 13,000円+税 ISBN 978-4-7576-0901-3)

前川喜久雄監修，伝康晴・荻野綱男編，岡照晃・伝康晴・内元清貴・山田篤・宇津呂武仁・松吉俊・土屋雅稔・近藤泰弘・坂野収・多田知子・岡田純子・山元啓史・荻野綱男・矢澤真人・丸山直子・星野和子・小磯花絵著『講座日本語コーパス7 コーパスと辞書』

国立国語研究所で行われている日本語コーパスのプロジェクトに基づいて、日本語コーパスとは何か、その構築から研究での利用・活用までを概観し、日本語学、言語学での統計学的アプローチを解説するシリーズの1冊。第7巻の本書では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発による、語の具体的な文脈における用法を示すコーパスと個々の語に関する様々な属性を網羅的に与えてくれる辞書に関する様々な成果の一端を紹介している。

本書の構成は次のとおり。「本講座の刊行にあたって」「まえがき」に続き、「第1章 言語研究のための電子化辞書（岡照晃）」「第2章 異なる粒度での語の解析（伝康晴・

内元清貴・山田篤)「第3章 機能表現の計算機処理(宇津呂武仁・松吉俊・土屋雅稔)」「第4章 コーパスから抽出した複合辞(近藤泰弘・坂野収・多田知子・岡田純子・山元啓史)」「第5章 コロケーションの辞書記述(荻野綱男)」「第6章 コーパスによる辞書の記述内容の検証(矢澤真人)」「第7章 コーパスを利用した辞書記述の試み(丸山直子・星野和子)」「付録A リレーショナルデータベース(小磯花絵)。末尾に「索引」を付す。(田中佑)

(2019年3月25日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 314頁 3,800円+税 ISBN 978-4-254-51607-4)

三保忠夫著『尺牘資料における助数詞の研究 明国から日本へ』

本書は、「尺牘資料」「日用類書」、並びに、日本の『尺牘式』『尺牘式補遺』を資料に、近世の助数詞の語彙的側面について考察しようとするものである。

本書の構成は次のとおり。「緒言」「序章 尺牘資料と助数詞」「第一章 尺牘資料における助数詞」「第二章 『尺牘式』における助数詞」「第三章 『尺牘式補遺』における助数詞」「第四章 明代日用類書における助数詞」「尺牘資料・日用類書——助数詞漢字索引(第一章～第四章)——」。巻末に「索引(書名・人名・事項)」「あとがき」を付す。

なお、本書は武蔵野書院創業100周年を記念して刊行された出版物である。(田中佑)
(2019年3月25日発行 武蔵野書院刊 A5判縦組み 392頁 13,500円+税 ISBN 978-4-8386-0718-1)

竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』

本書は、成城大学大学院文学研究科・国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」共催、成城学園創立100周年・大学院文学研究科創設50周年記念シンポジウム(2017年7月2日開催)における研究の成果をまとめた論文集である。

「はじめに」に続く、以下の6つの章から構成される。「第1章 現代日本共通語(口語)における主語の格標示と分裂自動詞性(下地理則)」「第2章 熊本市方言の格配列と自動詞分裂(坂井美日)」「第3章 京都市方言における情報構造と文形態——格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性——(竹内史郎・松丸真大)」「第4章 沖縄県久高島方言の文法関係と情報構造の関係(新永悠人)」「第5章 第1～4章へのコメント(佐々木冠)」「第6章 語順と情報構造の類型論(風間伸次郎)。末尾に「おわりに(木部暢子)」「索引」「執筆者一覧」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年3月28日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 192頁 3,200円+税 ISBN 978-4-87424-793-8)

内田賢徳・乾善彦編『万葉仮名と平仮名——その連続・不連続——』

本書は、2017年8月に行われたシンポジウム「万葉仮名と平仮名——その連続と不連続——」での成果をまとめた論文集である。平仮名が万葉仮名から成立したという通説

の批判を主な目的としており、両者の連続性と不連続性をいかに捉えるかを議論の一つの焦点としている。

「はしがき」「基調報告 平仮名成立まで（内田賢徳）」に続く、三部構成。「第一部 文字環境としての漢字文献」には「漢字文献の仮名とその展開——訓字と仮名の揺らぎをめぐって——（奥田俊博）」「第一部の綜括（乾善彦）」が、「第二部 平仮名の登場」には「平仮名成立の諸要件（中山陽介）」「「かな」と真仮名の連続と不連続を考えるために（長谷川千秋）」「思うままに書けるように——「仮名」が「かな」になる過程を考える——（奥村悦三）」「第二部の綜括（乾善彦）」が、「第三部 万葉仮名と平仮名」には「漢字の表意性から見た「かな」の成立（澤崎文）」「仮名の成立について——万葉仮名から「仮名」へ——（佐野宏）」「濁音専用仮名はなぜ万葉仮名から継承されなかったか（遠藤邦基）」「第三部と全体の綜括（内田賢徳）」が収められている。末尾に「研究の展望（乾善彦）」「執筆者紹介」を付す。（阿久澤弘陽）

（2019年3月30日発行 三省堂刊 A5判縦組み 240頁 3,600円＋税 ISBN 978-4-385-36167-3）

飛田良文・佐藤武義編集代表，田中牧郎編，森山由紀子・西尾純二・茂木俊伸・蓑川惠理子・はんざわかんいち・金水敏・伊藤雅光・加藤昌男・三宅和子・笹原宏之・大河原眞美・森篤嗣・関根健一著『シリーズ〈日本語の語彙〉7 現代の語彙——男女平等の時代——』

本書は、現在の研究の最前線を踏まえ、新しい視点・成果を提示するために企画・編集された『シリーズ〈日本語の語彙〉』の一冊として刊行されたものであり、女性の社会進出、国際化、情報化、IT化といった社会のありようの変化に応じた語彙の変化を取り上げている。

本書の構成は次のとおりである。「序 現代の語彙への誘い（田中牧郎）」に続き、「第1部 変貌する現代社会と語彙」に「第一章 言葉の性差の背景とゆくえ（森山由紀子）」「第二章 待遇場面による語の選択（西尾純二）」「第三章 外来語の氾濫と定着（茂木俊伸）」「第四章 商品命名という言語行為（蓑川惠理子）」、「第2部 メディアによる語彙の創造と広がり」に「第五章 作家による語彙の創造（はんざわかんいち）」「第六章 アニメキャラクターの言葉（金水敏）」「第七章 流行歌・Jポップの言葉（伊藤雅光）」「第八章 テレビ放送による言葉の広がり（加藤昌男）」「第九章 新しいコミュニケーションツールとネット集団語（三宅和子）」、「第3部 語彙の規範と改良」に「第一〇章 医学用語の特徴と医療の言葉（笹原宏之）」「第一一章 裁判員制度の導入と司法の言葉（大河原眞美）」「第一二章 外国人のための「やさしい日本語」における言葉の基準（森篤嗣）」「第一三章 語彙はなぜ国語政策に取り上げられないのか（関根健一）」。末尾に「執筆者紹介」「索引」を付す。（田中佑）

（2019年4月10日発行 朝倉書店刊 A5判縦組み 208頁 3,700円＋税 ISBN 978-4-254-51667-8）

木部暢子編『明解方言学辞典』

各地域のことはば(方言)を調査・研究するときを知っておきたい概念や用語, 必要な事項をできるだけわかりやすく解説した辞典。

「はしがき」「執筆者一覧」「凡例」「目次索引」に続き, 約190の「項目」が採録されており, 末尾に英日対照表などを含む「付録」が付されている。(阿久澤弘陽)

(2019年4月20日発行 三省堂刊 B6判横組み 192頁 1,800円+税 ISBN 978-4-385-13579-3)

国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 38』

特集として外来語・語彙交流に関する論考が集められる。

内容は次のとおりである。まず, 特集には, 「飛鳥・藤原京時代の「匹(ヒキ)」について——朝鮮半島から日本へ——(三保忠夫)」、「アレクサンドル・ド・ロード『ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書』(1651)の日本語(岸本恵実)」、「近世期蘭学関係の医学書に使用された長音符号の実態(久田行雄)」、「『航米日録』の外国語語彙——ヲールコールニ似テ大ナルモノアリ(略)彼ノ名ニアールゲント云フ——(浅野敏彦)」、「『蒐集』「収集」の意味分化と「コレクション」——「代用字表記語」の受容の一例として——(鳴海伸一)」、「明治前期の音訳外来語——『明六雑誌』『国民之友』の外来語調査——(田中牧郎)」、「新聞における外来語「ルール」の叙述基本語化——叙述型の拡張過程を探る——(金愛蘭)」、「日本にかかわりのある台湾の流行語についての考察——香港・中国大陸・韓国にかかわりのある台湾の流行語との比較を通して——(王敏東)」が収められている。その他の論考には, 「ヌク[脱]・ノク[除・退](蜂矢真郷)」、「助動詞ム論(栗田岳)」、「語構成から見た形容詞——中古から中世への変遷——(村田菜穂子・前川武)」、「勅撰和歌集の語彙の量的構造をめぐって——品詞の構成比率の観点から——(菊池そのみ・菅野侑匡)」、「類義語との関係から見たコノゴロの変遷(山際彰)」、「上杉本『伊呂波盡』をめぐって(山田健三)」、「辞書の系譜的関聯(今野真二)」、「キリシタン版『日葡辞書』補遺篇の見出し語——見出し界格語について——(中野遙)」、「高山房刊「唐詩選」関連書籍群における注釈表現の諸相(山本佐和子)」、「『尾蠅欧行漫録』に見える「電発」について(新井菜穂子)」、「大正2年『読売新聞』の日本語関係記事について——「新聞記事データベース」活用の一例として——(新野直哉)」、「カ行変格活用の全国分布とその解釈(彦坂佳宣)」。末尾に「語彙索引」、「人名・書名・事項索引」が付く。(田中佑)

(2019年4月25日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 436頁 11,000円+税 ISBN 978-4-7576-0907-5)

大木一夫編『ガイドブック 日本語史調査法』

本書は, 日本語の歴史を明らかにするためにはどうしたらよいかという点に関する手続きを解説するものである。通読することによって日本語の歴史を明らかにするための基本を学ぶことができるのは勿論のこと, 授業や卒業論文で日本語の歴史を考える際のマニュアルとして活用できるよう, 必要な範囲から順次利用することも想定した構成が

取られている。

本書の構成は次のとおり。「はしがき」「第1章 日本語の歴史を明らかにするために(大木一夫)」「第2章 古い文献の姿(鳴海伸一)」「第3章 日本語の歴史のための資料(百留康晴)」「第4章 古典作品を活字本で読む(佐藤志帆子)」「第5章 漢字で書かれた文章を読む(後藤英次)」「第6章 写本・版本の読み方(大木一夫)」「第7章 古辞書をつかう(勝田耕起)」「第8章 現代辞書を利用する(松崎安子)」「第9章 参考文献を探す(安本真弓)」「第10章 用例を集める(マシュー ジスク)」「第11章 電子テキストを利用する(マシュー ジスク・後藤英次)」「第12章 ことばの歴史を構築する(大木一夫)」。巻末に「日本語史研究のための文献ガイド」「資料 日本語史研究のための電子テキスト一覧(マシュー ジスク)」「索引」「執筆者紹介」を付す。(田中佑)
(2019年5月15日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 328頁 2,600円+税 ISBN 978-4-89476-854-3)

浅野敏彦著『近代のなかの漢語』

本書は、近代に用いられた漢語を対象に、近代日本語の一斑を漢語という視点から論じた著である。第二章では漢語の近代前史について、第三章では新しい事物や思想の受容に果たした漢語について、第四章では漢語の一般層への膾炙について述べられている。

「第一章 序に代えて—近代語をめぐって—」「第二章 日本語の歴史の中の漢語」「第三章 近代と漢語—新しい世界の受け入れ—」「第四章 近代語—非識字層の漢語—」「第五章 おわりに」の五章構成。第二章は「I 漢語について」「II 漢語「綺麗」の歴史」「III 漢語「光景」の歴史」、第三章は「I 西洋医学思想の受け入れと漢字・漢語—『扶氏経験遺訓』を例に—」「II 『航米日録』の漢語語彙—巻一を中心にして—」「III 『航米日録』に見える「行頭」をめぐって—幕末武士の近代語—」「IV 新島襄の書簡に見える「博物館」について—新語の獲得と広がり—」「V 新島襄の書簡に見える「幸福」について—新しい思想との出会い—」「VI 森鷗外『舞姫』に見える白話語彙」「VII 森鷗外『舞姫』の白話語—「食店」をめぐって—」、第四章は、「I 明治の漢語」「II 『西洋道中膝栗毛』主人公三人の漢語の層—魯文執筆部分において—」「III 『西洋道中膝栗毛』主人公三人の漢語語彙—「童蒙必讀漢語圖解」の漢語語彙と比較して—」。末尾に「初出等一覧」「あとがき」「索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年5月30日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 308頁 8,500円+税 ISBN 978-4-7576-0904-4)

岩男考哲著『引用形式を含む文の諸相—叙述類型論に基づきながら—』

本書は、引用助詞「と」に動詞「言う」の条件形が付加した「といえは」「といったら」「という」とを含む文について、叙述の類型に注目しながら考察を行い、引用構文に由来する上記の各形式が、引用構文のどのような働きを引き継ぎ、また変化させて、現代

日本語に存在しているのかを捉えようとするものである。補説として、上記の形式と同じく引用助詞「と」と動詞条件形から成る「ときたら」に関する考察も収められている。

本書の構成は次のとおり。「第1章 序論」「第2章 叙述類型論からの提言」「第3章 引用形式を用いた文のひろがり——「たとえば、といったら、というと」を中心に——」「第4章 用法の背景」「第5章 引用形式を用いた提題文の叙述の類型」「第6章 研究の今後の展開に向けて」「補説 「ときたら」を用いた文の諸相——提題文を中心に——」。巻末に「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。(田中佑)

(2019年5月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 200頁 3,400円+税 ISBN 978-4-87424-797-6)

陳力衛著『近代知の翻訳と伝播——漢語を媒介に——』

本著は、明治以来の近代漢語を対象に、近代漢語の急増の要因、近代中国における日本由来の新語新概念の受容、新語新概念の意味変化の要因やその背景に対する考察を通して、その全体像を明らかにした著である。

「序章 漢語の近代」に続く、三部構成。「第I部 漢語の由来と翻訳語としての確立は、「第1章 漢語の抽出」「第2章 唐話の学習と吸収」「第3章 近代知としての『博物新編』」「第4章 漢訳『万国公法』から和訳『国際法』へ」「第5章 近代翻訳語の宝庫——英華字典——」「第6章 蘭学以来の漢語創出——「一力」、「一性」を中心に——」「第7章 明治の文体に支えられて——漢語故事・ことわざの盛衰——」で、「第II部 中国に伝わる新語・新概念」は、「第1章 近代欧化文体に見られる日本的要素」「第2章 「同文同種」の陥穽——『和文漢読法』の増補と『言海』——」「第3章 政治小説『雪中梅』の翻訳と新漢語の伝播」「第4章 社会主義思想の中国への伝播——『共産党宣言』の翻訳を通して——」「第5章 波寄せてくる日本新名詞にいかに対処すべきか——近代中国語辞書の対応——」「第6章 英和辞書による中国語への語彙浸透」「第7章 現代中国語にどのくらいの日本借用語があるのか」で、「第III部 語史から概念史へ」は、「第1章 近代漢語の出自と語史記述」「第2章 漢語の出典確認の限界——『四庫全書』を例に——」「第3章 近代漢語の履歴」「第4章 日本語の「気管支炎」から中国語の「支気管炎」へ」「第5章 「民主」と「共和」の意味補完」「第6章 「主義」の流布と中国的受容」「第7章 「優勝劣敗、適者生存」——進化論の伝播に寄与する和製漢語——」「第8章 「金字塔」の由来とそのイメージ形成」で構成され、「終章 漢語の現在と未来」で締められる。末尾に「参考文献」「あとがき」「人名・書名索引」「語彙索引」を付す。(阿久澤弘陽)

(2019年5月31日発行 三省堂刊 A5判横組み 576頁 3,800円+税 ISBN 978-4-385-36095-9)

野村剛史著『日本語「標準形」の歴史——話し言葉・書き言葉・表記——』

本書は、日本語の標準形(スタンダード)をテーマとして、話し言葉、書き言葉、表記の歴史を扱っている著である。第I章で話し言葉スタンダードの形成を、第II章で

書き言葉スタンダードの転換を、第 III 章で表記のスタンダード形態の転換を論じている。

「はじめに」に続く三章構成。「第 I 章 話し言葉のスタンダード」は「I-1 話し言葉と書き言葉、方言と中央語」「I-2 中央語からスタンダードへ」「I-3 スタンダードの楕円化」「I-4 明治維新」「I-5 「標準語」」で、「第 II 章 書き言葉のスタンダード」は「II-1 近現代口語体」「II-2 普通文」「II-3 近世標準文語文」「II-4 中世書き言葉スタンダード」「II-5 漢文、漢文訓読、漢文訓読体（漢文訓読調）、変体漢文、和漢混淆文、記録体、仮名文、和文」で、「第 III 章 表記のスタンダード」は「III-1 表記法大概」「III-2 片仮名の使用」「III-3 音韻と仮名」「III-4 仮名遣い」「III-5 近代仮名遣い問題」「III-6 活字印刷」で構成される。末尾に注を付す。（阿久澤弘陽）

（2019年6月10日発行 講談社刊 四六判縦組み 272頁 1,850円+税 ISBN 978-4-06-516385-6）